▶志染町広野で喫茶店を営む、杣原正典さん（左）と洋美さん（右）。

“困ったときはお互い様”

ある日、愛する妻が認知症と診断された。その後も、「妻が望むことは何でもさせてあげたい。」と、二人の幸せな暮らしを考える杣原（すぎはら）正典さんを取材しました。

認知症になってもできることは続けてもらう

正典さんが洋美さんの異変に気付いたのは、今から7～8年前のこと。洋美さんが深酔いするくらいまで飲酒をするようになり、正典さんが注意すると「いっぱい飲んだるわ！死んでもええ！」と言い出したことからでした。

その頃から、正典さんは、できていたことができなくなった洋美さんの姿をよく目にするようになりました。

2年前、洋美さんが近くの病院で検査を受けると「アルツハイマー型認知症」と診断されました。

その後も、「できることは何でもさせてあげたい。」と、正典さんは洋美さんが長年一人で切り盛りしてきた喫茶店の仕事を継続できるよう、自身も厨房に立つことを決めました。注文が入ると、正典さんが料理を作り、配膳やお弁当の配達を洋美さんがするようにしています。

迷惑かけてもええやんか

「大切にしていることは、洋美さんに合わせること。」と話す正典さんは、洋美さんが鍵をかけ忘れたと言えば一緒に見に行き、コンビニに行きたいと言えば、千円だけ持たせて、店員には「好きなようにさせてやって。」とお願いし、ただ見守るそうです。

「考えが遅くなったり、忘れたり、失敗したりするけれど、だからといってこれまでの暮らしを諦める必要なんてない。」と力強く語る正典さん。

コーヒーカップを丁寧に整える洋美さんの横顔を見ながら、「十人十色の人生がある。時には誰かに迷惑をかけてしまうこともあるけれど、感謝の気持ちを忘れずに、こうと思ったことをやってみることが大事なんじゃないかな。」と正典さんは語りました。

お互いに愉快な冗談を言い合うなど、明るい笑顔が印象的な杣原さんご夫婦。

30年来の慣れた手つきでコーヒーを淹れる洋美さん。